第一章　原始時代

第一節　石器時代

一、石　　器

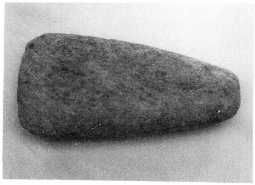
石を打ちかいたり、砥石で磨いたりして種々の道具を作り生活をしていた時代を「石器時代」とよんでおり、これをさらに、旧石器時代・中石器時代・新石器時代と大きく三つに区分している。

旧石器時代は、人類が地球上に出現して以来、数十万年もの長い間続いている。

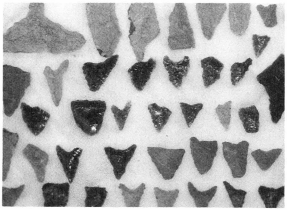
この時代の石器は、自然石の一端を打ちかいた簡単な刃物のようにした礫器が現われ、続いてやや形のととのった握斧（握りつち）、尖頭器（石槍など）、掻器（皮はぎなど）、彫刻刀形石器、ナイフ形石器などの打製石器が発達した。

中石器時代になると、石鏃（せきぞく）（矢じり）などのほか、細石器（さいせっき）がさかんに作られるようになった。

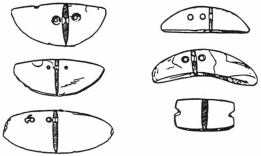
新石器時代は、およそ一万年ほど前に始まり、形のととのった打製石器とともに、砥石を使って磨いた磨（ま）製石器があらわれ、各種の道具・武器・装身具が作られた。



折地出土　石斧



ヒイデン洲出土石器



石包丁

これらの石器に使用された石の材質は、時代によりまた使いみちによって相違はあるが、黒曜石、珪石・石英・安山岩・砂岩・蛇紋岩・粘板岩などである。石器の製作された時代・材質・使用法などについて述べてみることにする。

石包丁　弥生時代のもので、長さ12～13㎝で、凝灰岩などで作られた平板状の半月形石器である。円弧の縁近くに、二個の小孔があり他の辺が刃状をしている。孔にひもを通して指にかけ、稲の穂をつみとるための農具である。

石鏃　縄文・弥生時代にまたがるもので、縄文時代は打製で先端がするどく、三角形や菱形をしており、弥生時代のものは打製とともに、磨製の石鏃が発達してきている。材質は、黒曜石、安山岩、粘板岩などで、柄をとりつけて狩猟に使われていた。

石斧　縄文・弥生時代にかけて作られたもので、縄文時代のはじめには、刃の部分だけを磨いたものからしだいに全体を磨いた美しいものが作られた。写真は、本町折地の大辻より出土したもので一部分欠けた所があるが、全体

を磨いたものである。

材質は、花崗岩・輝石・安山岩などが用いられている。

弥生時代のものは、磨製石器で蛤刃のもの、扁平で片刃のもの、柱状で片刃のものが多く、「おの」のほか、「手斧」、「のみ」などの工具として使用されていたと考えられる。

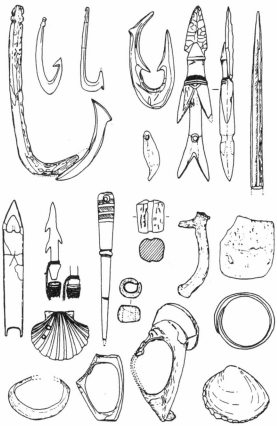
二、骨　角　器

石器とともに生活の用具として使用されたものに骨角器がある。

哺乳動物の骨・角・歯牙や鳥類の骨・魚の骨などを使って作成されており、銛・釣針・縫い針・矢じりなど主として狩猟用として使われたものが多い。

時代が進むにつれて装身具が多くなり、垂飾・髪飾・そのほか貝殻を利用した貝輪などがある。

鹿の骨と角、猪の骨と牙がもっとも多く用いられており、削ったり、砥石で磨いたり、中には細かい彫刻がなされているものもある。



骨格器の種類

三、洞窟の生活

原始社会の人々は、洞窟や岩陰に住み、狩猟や漁によって生活をしていた。

一九二六年、中国の北京郊外にある周口店で発見された原始人の化石とともに、ナウマン象の骨の化石が見つかっており、また、同時に生活の中に「火」をとり入れていたことが証明されている。

この巨大な動物をたおすためには多くの人々の協力が必要であるし、お互の意志を伝えるためには言語もあったと考えられる。女や子供は洞窟の近くで木の実を集め海辺や川で貝などの採集をしたであろうし、男達は遠くまで出かけて大きな獲物を手にいれるというように、男と女、成人と老幼との間に分業があらわれていたと考えられる。

そのほか、洞窟や岩陰に色彩で絵をかくことが行われ、また、天体、自然物、動物に対する厚い信仰もみられる。

県内における洞穴遺跡としては、球磨郡球磨村に大瀬洞穴、高沢洞穴があり、大瀬洞穴では、縄文時代早期の生活の跡が確認されている。

岩陰遺跡としては、鹿本郡菊鹿町の天の岩戸遺跡がある。この遺跡からは、縄文から古墳時代にかけての遺物が発見されており、抜歯した壮年女性の人骨が検出されている。

第二節　縄文時代

縄文時代は、紀元前七～八〇〇〇年前から、紀元前三〇〇年ぐらい前までの間をさしており、表面に縄を回転させたり押しあてて縄目の文様をつけた縄文土器を生産した時代で、この時代をふつう早期・前期・中期・後期・晩期の五期にわけている。

一、縄文時代の生活

この時代の人々は火を使うことを知り、木や石や獣の骨で生活の用具を作り、森林をひらいたり焼きはらったりして居住地をひろげ、森林のへりや、海や川にのぞむ丘のはしに竪穴式住居とよぶ草で屋根を葺いた住居に住み、さらに、物を入れたり煮炊きするために土器を作るなどして、当時としては文化的な生活を営みはじめた人類の「文化のあけぼの」の時代であるといえる。

衣　当時は今よりだいぶ暖かかったといわれているが、裸で暮していたとは考えられない。洞窟の壁にかかれている絵などから考えてみると、獣の毛皮をはいで身につけたり、木の皮をはいでたたきのばして布をつくり肩から腰にかけて身にまとっていたことが想像される。

さらに後期になると、草や木の繊維を使って布を織り、筒袖にズボンをはいていたらしいといわれている。

装飾品については、早期から前期にかけて石で作った耳飾りが発見されているが、これも後には固い石で作られるようになってきている。

後期から晩期になってくると、漆塗りの木製腕輪や鹿の角で作った腰飾りなどもあらわれてきている。

食　後に述べる貝塚の発掘によって、どのようなものを食べていたか想像できるが、海や川からは貝類をとり、弓矢・銛・釣針・網などを使って鳥や獣・魚などをとり、獲物は石の包丁で切り、火に焼いて食べていたと思われる。植物性のものとしては、木の実はもちろん草の葉や根などを食べていたことが居住跡から発掘された「つぼ」の中に、どんぐりや椎の実が貯えられていたことなどからもわかる。

これまでに発掘された骨や貝殻・石器などから、彼らが食用としていた鳥や獣の類は、イノシシ・シカをはじめとして六〇種以上にのぼり、魚類は三〇余種、貝類は二二〇余種が明らかにされている。また、クリ・クルミなどの果実は、敲石・凹石で殻を割り磨石と石皿で製粉もされていたのではないかと考えられている。

住　早期では、人びとが住居を持たず食物を求めながら洞窟や岩陰を利用して住んでいたことが多く、現在の平地より山にかこまれたけわしい環境で生活していたことがこれまでに発見された早期の遺跡の所在から考えられる。県内における洞窟遺跡については石器時代の項で述べたとおりである。

竪穴住居（菊水町民家村）

洞窟や岩陰につづいて住居として発達してくるのは、いわゆる竪穴式住居である。

竪穴といっても深いものではなく、地面を数十cm掘りさげ、床に柱を何本も立ててその上をススキやカヤで葺いた屋根でおおったものである。

穴の形は、前期は方形であるが中期以降になると円または楕円とな

っており、広さも径五ー六ｍから七ー八ｍと大きくなり中心に炉がつくられている。

中期末から後期になると、平地住居・敷石住居といわれるもので、地表面を円形または楕円形にくぎり、粘土を敷き固めたり、石を敷きつめたりした住居が見られる。

これらの住居跡は、一ケ所に数個または数十個集っている場合もあり、集団としての生活がはじめられたことがうかがわれる。

習俗　家族生活から集団の生活へと発展して行くと、そこにはお互の意志をどのようにして相手に伝えるか、すなわち言語や文字が必要となってくる。

現在のような言語や文字が現れてくる以前はどのようにしていたのであろうか。

何らかの形で言語に近いものはあったであろうが、証明できる記録などは勿論あるはずがない。

意志の伝達として考えられることは、第一に言語以外の音声によるものである。うれしいとき、悲しいときに自然に出てくる歓声やうめき声などがそれである。第二には身ぶり手ぶりなどによる身体を動かしての表現によるもの、第三には、数などをあらわすのに個体をならべたりひもに結び目などをつけていたようである。

衣類や装身具については前に述べたが、直接身体にほどこされた装飾としては、特定の歯を抜いたり、歯をとがらせたりすることが後期から晩期にかけて全国的に広まっており、これは成年式の一種の試練の行事として行われたものと考えられる。

埋葬には、死体の足を膝で曲げた屈葬が多く、胸部に石を抱かせたものもあり、死霊を恐れて地上に現れ

ることをこばもうとしたのであろうとの説もある。

そのほかに信仰関係の遺物としては土偶（どぐう）がある。土偶には女性をあらわすものが多く、乳房をあらわし、ときには妊娠の状態であらわされたものもある。

原始社会では、世界的に地母神信仰が分布しているが、土偶はこれと似たもので、母性崇拝・生殖崇拝の原始信仰に基づく呪術宗教的な意味を持っていたと思われる。

貝塚　この時代のようすを伝えるものの手がかりとして貝塚がある。

石器時代から縄文時代にかけて当時の人々が食用にしていた貝のからや、動物、植物の食べかす、それに不要になった道具などを自分の住居のまわりなどに捨てたものがたまった遺跡を貝塚とよび、当時の生活や海岸線のようすを知る手がかりとすることができる。

貝塚は、出土する貝がらの種類によって、淡水産のものと海水産のものとにわけられ、当時は海の近くであったかどうかの判定の手がかりとなっている。

貝層中やその下からは、石器・土器・骨角器・土偶などの遺物や人骨などが発見され石器時代から縄文時代へかけての人々の生活を研究するうえでの重要な資料となっている。

日本で最初に学術調査が行われたのは、東京都大田区山王町一丁目と品川区鹿島町にまたがる大森貝塚で、明治一〇年（一八七七）六月にアメリカ人のモースが車窓から発見し、東大の学生とともに九月から一一月にかけて発掘し、明治一二年（一八七九）「大森介墟」を出版して世界に紹介されている。

二、玉名・荒尾の縄文遺跡

玉名・荒尾地区には分布図に示すように多くの縄文遺跡がある。

・古閑原貝塚　岱明町高道にあり、昭和二三年（一九四八）発掘され、縄文期の阿高式土器とともに、貝層下の粘土層から八粒の籾（もみ）が検出されたが、当時は、それが縄文中期というあまりにも古い時代であることや、同時に農具が発見されていないということで学界から見送られてしまっている。

しかし、菊池郡大津町小林の「ワクド石」からでた縄文晩期の御領式土器に玄米の圧痕らしいものが見つかり、さらに、福岡県より発掘された夜臼（ゆうす）式土器とともに焼けた炭化米が発見されたことから、「稲作のはじまり」の時期を考えなおさなければならないようになってきている。

同貝塚からは、そのほか鹿角の尖頭器や磨かれた鹿の肩甲骨、扁平小形の片刃磨製石斧など注目されるものが多く、特に鹿の頭骨にサヌカイトの打製石槍が刺ったまま発見されたのは珍しいことである。

岱明町庄司の庄司貝塚・天水町尾田貝塚・竹崎貝塚も阿高式系の土器を主体とする縄文式貝塚である。

若園貝塚　菊水町江田の若園貝塚は、菊池川流域では最も上流にあり、現在の海岸線からおよそ一七kmの位置にありながら、海水

荒尾・玉名の縄文遺跡

産の貝がらを包含していることから、当時は海岸線に近かったと推測される。

阿高式土器や、装身具として使った獣骨片も出土したといわれている。

境崎貝塚　荒尾市の尾勝山西裾に属する猪の鼻の斜面にあり、裾の部分からは阿高式土器を、丘の上の堆積層の下部層からは縄文後期の御領式土器が検出されている。

主な貝塚について述べたが、これらを含めた遺跡は下の表の通りである。

玉名・荒尾地方の縄文遺跡

遺跡名	所在地	時期又は出土品
境崎貝塚	荒尾市	阿高式・御領式
四山貝塚	〃	縄文後期
十蓮寺遺跡	〃	縄文早期
宮内貝塚	〃	縄文後期
目倉尾遺跡	岱明町	
庄司遺跡	〃	縄文中期
古閑原遺跡	〃	阿高式
中道貝塚	〃	夜臼式・遠賀川式
保田木貝塚	玉名市	阿高式
繁根木貝塚	〃	阿高式
竹崎貝塚	天水町	竹崎式
斉藤山貝塚	〃	夜臼式
尾田貝塚	〃	轟式・曽畑式
若園貝塚	菊水町	阿高式

三、縄文土器

縄文時代の早期までの間にはそれぞれの特色を持った土器がつくられている。

早期の形は底のとがった深い鉢形をしており、焚火のかたわらの土中にこの土器を立てて煮たきの用具として使われていた。

前期になると、東日本の土器は円筒型平底で表面に縄文があり、また植物のせんいを混入したものも見られる。西日本では、丸底が多く、ときには平底の甕（かめ）が主となっている。

火炎土器

中期の土器は、形や装飾についても技術的にすばらしく進歩をとげている。文様は縄文の上に粘土をはりつけた隆起文をほどこし、顔面把手や火炎状把手をつけたり、文様化した動物の装飾をつけたりしている。

後期の土器は、中期にくらべて小型となり製作技術の進歩によって薄くてじょうぶな焼きとなっている。

晩期になると、皿、碗、土びんなど生活の用途に応じたいろいろなものがあらわれ、文様も細かくなり縄文を一部すり消して装飾に変化をもたせるようになったものもある。

熊本の縄文土器　熊本の縄文土器は、九州で最も多く出土しており、基準とされる遺跡は三二ケ所のうち一四ケ所が熊本県内のものであり、その時代や様式によって表のように分類することができる。

時期区分	土器の形式名		
早期	沈目（熊本県下益城郡城南町）	曽畑（熊本県宇土郡宇土市）	
前期	石清水（熊本県人吉市願成寺町）		轟（熊本県宇土郡宇土市）
中期	竹崎（熊本県玉名郡天水町）	阿高（熊本県下益白郡城南町） 頭地（熊本県球磨郡五木村） 南福寺（熊本県水俣市）	

熊本の縄文土器編年表

「火の国」井上辰夫著を参考にした。

晩期	後期
	御手洗A （熊本県菊池郡合志町）
	渡鹿 （熊本県熊本市大江町） 御手洗B （熊本県菊池郡志町） 西平 （熊本県八代郡竜北村） 三万田K （熊本県菊池郡七城村）
御領 （熊本県下益城郡城南町） ワクド石 （熊本県菊池郡護川村） 三万田B （熊本県菊池郡七城村）	

これ等基準となった土器の文様の特色について述べると次のようである。

押型文　粘土に網目を押しつけてあらわした文様で最も初期のものである。つぎに細い棒に紐を巻きつけて転がしながら押しつけて文様をあらわしたものを「より糸文」とよんでいる。

そのほかの押型文としては、小豆粒ぐらいの凸文を浮き出させた穀粒（こくりゅう）文、反対に凹文をつけた押点文、小さい凹線で山形を配列した山形押型文、竹べら等でひっかいたような斜線をつけた刷毛目文などがある。

曽畑式　外面のほぼ全面と内部の一部に細いへら状、棒状の道具を使って平行の線文や鋸の歯のような形の線などを連続的に組み合せた文様である。

轟式　貝の殻などを押しあてて、口唇部に細かい刻み目がつけられ、また口縁部から胴部にかけてミミ

ズばれ状の貼付文は、渦巻状・波状・平行線の文様である。

阿高式　幅広い大型の凹線文と押点文で、押点文は口唇部と文様帯上部に施されているのが通例である。凹線文は、文様帯を斜めに区画する基準線と、それにより形成される三角形空間を埋める直線・曲線で複雑な入組文をしている。

竹崎式　阿高式土器といっしょに出土する場合が多く、全面に縄文をほどこしてある。

西平式　口縁部は大きな波状をしており三本の沈線がめぐらされ波頂部付近で枝分れ状となっている。波頂下には対向弧文がつけられ、頸部には刻目列点文がつけられているのが通例である。

三万田式　口縁部は波状となり二本の沈線がある。胴部は四～六本の沈線をめぐらし、四区分および八区部された位置で「X」字状に反転している。

御領式　文様帯は屈折して立ち上がる口縁部をもつものにつけられており、二～三本の平行した沈線がある。アクセントは原則として四カ所にあり楕円形の押点がつけられている。

御手洗式　A式は、口辺部は広く、文様は単調であり、爪形文、列点文を口辺の近くに二条にほどこしてある。B式は、口辺部は大きく山形状をしており、文様は西平式や三万田式に似ている。

南福寺式　口辺部の文様帯は隆起しており、それにS字状又は逆S字状の文様がつけられている。特色のある文様としては、斜行線等の文様の中間に、土器の表面をヘラのようなもので掻きとり、三角形や鼓形の文様をつくりだしていることである。

（「九州縄文土器の研究」小林久雄著を参考にした）

九州縄文土器の研究

捺型文土器

曽畑式土器

轟　土　器

阿高式土器

西平式土器

三万田土器

御領式土器

御手洗Ｂ式土器

四、長洲町の縄文遺跡

長洲町における縄文時代の遺跡としては、腹赤新町・堀崎の両貝塚及び縄文土器の出土地として深田浦遺跡、ヒイデン洲遺跡がある。

数千年前のこの長洲一帯はどのようになっていたであろうか、縄文遺跡やそのあとの弥生遺跡を含めて地形の上からさぐってみると大体次のようなことがわかってくる。

海進と海退　腹赤新町・堀崎の両貝塚の位置を現在の海水面からの高さで計ってみると、両貝塚ともに約五ｍの等高線上にあることがわかる。また、海岸線からの距離は腹赤新町貝塚は約一、六〇〇ｍ、堀崎貝塚は約一、三〇〇ｍもあり、同じ五ｍの高さで最も入りこんでいるのは、菰屋（こもや）の変電所近くで約三、五〇〇ｍはなれており、今から二、〇〇〇年ほど前にはこれらの地点まで海が入りこんでいたと考えられる。

このような現象は、氷河期の氷がとけて海水が増加して陸地が水面下になってしまう「海進」の現象とか、反対に、地殻の変動によって海底が隆起したり、海が遠のいて陸地が広く現れる「海退」の現象によるもので、縄文時代から弥生時代にかけて人々が住んでいたこの地方は、年代がたつにつれて「海退」の現象や干拓工事によって今日のような海岸線となっている。

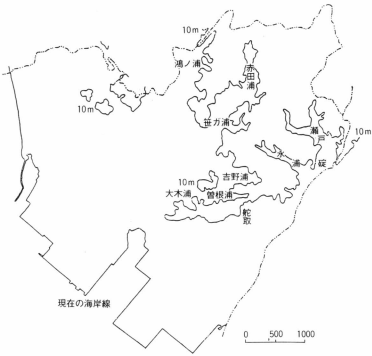
この「海退」の現象を実証するかのように、町内の小字名を調べてみると海に関係のある名がつけられていることがわかる。

長洲地区　内浜・前浜・外浜・井樋内

清里地区　西ノ浦・浦田・洲崎・浦・大浦・山ノ浦・浜浦・海老ケ浦・下浜

六栄地区　浜田・永浦・鴻ノ浦・碇・島廻り・瀬戸・赤田浦・井樋口・山ノ浦・吉野浦・笹ケ浦・飛ケ浦・曽根浦

腹赤地区　深田浦・大木浦・浦畑・磯田・内浜・梶取給・井樋内・井樋下・外浜・姫ケ浦・浦浜・狐島・西中島・東中島・浜尻・島巡・浜口・塘下



長洲町における古代の海岸線予想図

腹赤貝塚　腹赤貝塚は、腹赤新町の南方一〇〇ｍの一帯に拡がっていたようで、古老の話によれば、「五〇年ほど前までは『畠高地』といって、高さ三ｍ、広さ五―一〇ａの赤土台地が散在していた」といわれているが、その後、開田されて現在はその跡もみることができない。

この貝塚発見のきっかけとなったのは、昭和一八年（一九四三）玉名平野土地改良組合の灌漑用水路開削のため、腹赤新町より清源寺まで、深さ三ｍ、幅約三ｍほどに掘りあげられた排土の中に、主としてカキ殻ではあるが、ほかに少量の赤貝、ウバ貝、ツメタ貝、赤ニシ、アサリ貝などの貝殻が混っているのを、新町在住の林田賢氏（当時長洲町教育委員）によって採集調査され、約八〇個の土器片な

どが採集された。同氏の記録によるとその内容としては次のようなものがあげられている。

○　阿高式（縄文中期）
○　西平式・鐘ケ崎式・御手洗B式（縄文後期）
○　刷毛目文・押型文（様式不明）
○　その他の出土品
　カキ殻（長径二五㎝・短径一三㎝）
　漁用石錘　三個
　土偶　一個
　動物の顎骨・歯

堀崎貝塚見取図

昭和四二年（一九六七）腹赤新町の東端、村田幸太郎宅前を県道側溝工事のため幅一、三m、深さ一、四mをほりあげたところ、多くの貝殻とともに縄文後期の鐘ケ崎式の比較的大型の土器片が出土している。

堀崎貝塚　昭和三八年（一九六三）長洲駅前（現長洲タクシー裏）附近に露出していた貝殻の層に土器が混っているのを、当時町教育委員をしていた池田三次氏によって発見された。

県文化財専門委員であった田辺哲夫氏に連絡して調査がなされた。

調査は、駅の正面にあたるA・Bの二点を定めて、A点は、縦・横・深さ

ともに一m、B点は、縦八〇cm・横五〇cm・深さ五〇cmを掘って出土した品物を調査の結果、貝塚に間違いないことが確認された。

主な出土品としては

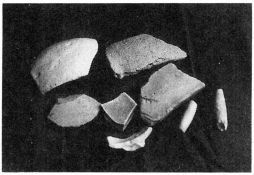
青磁器破片

石製ナベ（滑石製で裏面に焼跡あり）

骨片（不明）

縄文・弥生土器片　多数

漁網用ユラ（土師器と思われる）



堀崎貝塚出土品

紡錘器（滑石製）

これら出土品のうち主要なものは、調査にあたった玉名高等学校にあると思われるが、一部は、町中央公民館および清里小学校に参考品として展示さている。

昭和三九年（一九六四）長洲駅より約二〇〇m西にあたる梅田の中川良一氏宅前の道路側溝工事において、また、昭和五六年（一九八一）三月には、駅の西約一〇〇m・国鉄鹿児島本線の線路わきにて埋設工事中に、ついで、昭和五七年（一九八二）には、駅の西北方約四〇〇mの通称「ハヤウマサン」と呼ばれている所の側溝工事現場より、さらにまた、昭和六〇年（一九八五）三月には、駅より東へ約五〇mの磯辺ヨネ氏宅横の側溝工事現場からと、それぞれ、カキ殻、ウバ貝、赤貝などの貝殻とともに土器片が採集されている。

このことから、長洲駅を中心として堀崎一帯に貝塚が分布していたと考えられるし、駅前には「堀崎の井」

とよばれて豊富な湧水があったといわれ、古代人の生活環境としては最もよい所であったと考えられる。

（資料提供　池田三次氏）

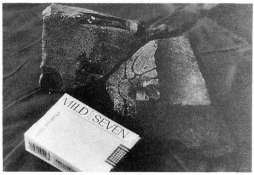
深田浦遺跡　腹赤新町北方に東西につらなる野々上台地およびその北に深く入りこんだ深田浦から土器片、石器等が発見されている。故、林田賢氏の記録によると出土品としては

曽畑式土器片　三十数個
磨製石槌（砂岩）　二個
磨製石斧（サヌカイト）　四個
磨製石剣（サヌカイト）　一個
石鏃　（黒曜石）　三個
黒曜石原石　二個

この中でも黒曜石の原石の出土はめずらしく、五六〇ｇと五一〇ｇもある大きなもので町中央公民館に展示されている。

黒曜石の九州における産地としては、林田賢氏によれば、阿蘇・大分県国東姫島・佐賀県腰が岳の三箇所しかなく、原石の色から判断して阿蘇産出のものとされている。

このことから、当時の人々の交易の範囲はかなり広く、玉名・山鹿・菊池・阿蘇など県の北部一帯となっていたことが考えられる。



黒曜石

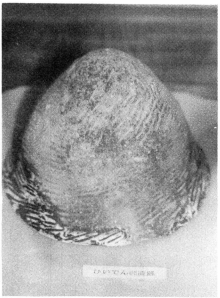
この深田浦からの遺物は、故、林田賢氏によって採集されており、黒曜石の原石を除き他の遺物の所在は明確ではない。

ヒイデン洲遺跡　ヒイデン洲は長洲港から西北二㎞の所、磯町の沖合にあり干潮時に露出する周囲六〇〇ｍほどの低い砂洲である。

磯町に在住してこの洲から土器や石器類を長期にわたって集めておられたのが林力氏であり、その数は千数百点にものぼるものとみられている。（現在は赤崎在住）

この遺跡については、玉名高等学校考古学部報第五号及び第八号に掲載された内容によって次のようなことが明らかになっている。

昭和三七年四月、田辺哲夫氏及び坂田邦洋氏によって基礎調査がなされている。



ヒイデン洲出土尖底土器

昭和三八年七月二一日、玉名高校の田辺哲夫氏、玉陵中学の田添夏喜氏のほか地質学の方から九州農政局の古川博恭氏および玉名高校の考古学部によって調査がなされ本町からも当時公民館主事であった林田幸昌氏が参加されている。

調査の目的としては、「海の底に沈んでいる遺跡ではないか」ということを調べるためのものであった。

結果としては、明らかに遺跡を包含した地層であること、または、潮流によってどこからか運搬されてきたものであること

のいずれの確証も得ることはできなかった。

その後も林氏の採収は続けられ、その膨大な遺物は同氏宅に保存されている。

土器は大別して押型文、特殊条痕文、細線刻文、の三種類に分けることができ、それぞれ尖底深鉢形、同平底土器に分類される。

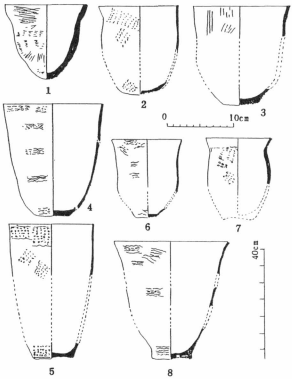
玉名高校考古学部報第八号に寄せられている賀川光夫・坂田邦洋両氏の論文の要点を次に述べることとする。

一類（第2図1）は、口縁部が外反している厚手の尖底土器の類で、口縁から胴部にかけては横方向に連続した押型の原体をすりつけていったような文様となっており、底部では、山形押型文とが入れまじっている。

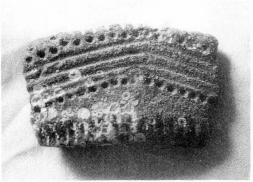
二類一式（第2図2）は、口縁部がわずかに外反し胴部の少し張った深鉢型の平底であるが丸底に近く、楕円の押型文がほどこされており、曽畑式に似た土器である。

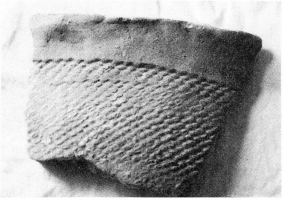
二類二式（第2図3）は、口縁部が外反し胴部の少し張った深鉢型の平底土器である。

ころがしながらこすってきずをつけた擦過条痕文が縦の方向に数段みられる。



ヒイデン洲遺跡出土土器復元図（第２図）





ヒイデン洲出土土器

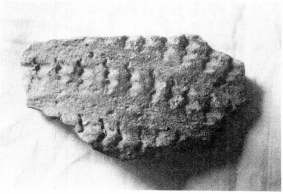
三類一式（第2図4）は、口縁部はやや外に開き、底部近くにやや張りをもつ深鉢形の平底土器である。

三類二式（第2図5）は、口縁直上の同筒形平底土器である。楕円の押型文で、不整形な楕円が6個、数列彫刻されている。

四類一式（第2図6）は、口縁部は外反する。胴部において屈曲するうすて深鉢の平底土器である。

四類二式（第2図7）は、口縁部が外反し胴部は口径とほぼ同じくらい弯曲している。壺形の平底土器と思われる。

四類三式（第2図8）口縁部がすり鉢状に開いた深鉢型平底土器である。



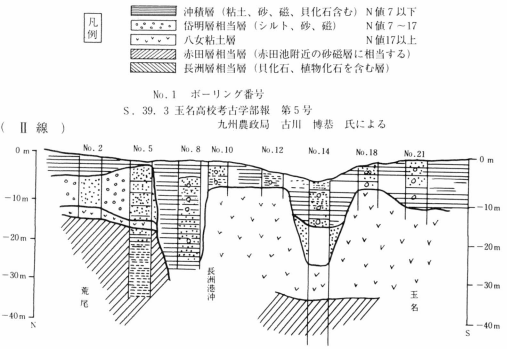
「ヒイデン洲」が海底遺跡であるかどうかについては、調査の結果「海底遺跡である」との判定は下されていない。

では、なぜこの膨大な数の遺物がここにあったかについては誰でも疑問に思うところであろう。

まず、海底遺跡としての可能性が大きいとする考

玉名・長洲沖海底地質断面図

第Ⅰ線は、ほぼ現在の海岸沿いに南北に結んだ線
第Ⅱ線・第Ⅲ線は、第Ⅰ線より海岸線に直角に沖合へ出た線で、名線の間隔は約500ａ



え方を紹介する。

「玉名高校考古学部報第五号」に、当時九州農政局に勤務されており、調査にもその一員として参加された古川博恭氏は地質学の上からみた海底遺跡についておよそ次のような説を述べられている。

「昭和三六年に有明海長洲地区工業地帯地下構造調査によって、長洲沖から菊池川河口にかけて海底ボーリングが行われた資料と、長洲一帯の陸上の調査結果から次のことが明らかになった。

表層は、現河川から運搬された砂や泥が潮流によって別な所へ運ばれ、さらに現在も動きつつある沖積層と呼ばれるもので貝交りの砂質および泥質である。

最表層の下に、表層を作っている砂および泥によって埋められた埋没谷が二つある。

一つは長洲町下を通り、港の北から「ヒイデン洲」へぬけるものであり、もう一つは、菜切川、浦川の

河口附近からのびる谷である。この谷は、今から約一万年前の旧浦川であり、旧菜切川である。

三万五千年前くらいの有明海の大部分は陸地で、当時の人々（旧石器人）は、現在は海底下になっているところでも自由に生活できたのである。一万五千年前～一万年前に海面がかなり上昇し現在の海面近くまできている。

一万年前にもう一度海面が現在より四〇ｍ程低下した時期にできた河の跡が二つの埋没谷である。

したがって、旧石器時代から縄文早期へ移行する時期は、少くとも長洲～玉名沖では陸地であったわけで、当時の人々は当然、現海面下に生活することも可能であったわけである。」

推定年代（西暦）	資料年代
531	焔知王２（480）
569	敏達帝（573）
649	天智帝５（666） 白雉３（652）
1141	久安元（1145） 寛治６（1092）
1475	応仁２（1468） 文明18（1486）

災害年表（真鍋佐藤報告書）

このほかの推測としては、

「ヒイデン洲」は浦川の河口となっており、小岱山西部・荒尾市荒屋付近に居住していた者の遺物が、洪水によって押し流されてきたものであると考えられる。

日立造船有明工場船渠工事の際に、九州大学工学部航空工学科の真鍋大覚、佐藤洋子両氏の調査報告によれば、長洲地先における天変地異のうち洪水によるものは、表のとおり五回あっている。

その他の推測としては、荒尾市大島町付近には、大島や姫島などの地名も残っており、四ツ山の南には大正の始めごろまでは、

百谷の土器片

第三紀初期の始新期洪積層の岩が沖まで突き出ていて「岩が崎」と呼ばれ、縄文遺跡の推定地でもあったので、潮流の関係で遺物が長洲の沖まで運ばれてきたものと考えられる。

「ヒイデン洲遺跡」については、今後の学術的調査によらなければ結論は得られないと思われる。

百谷遺跡　鷲巣の百谷から縄文時代のものとみられる土器が出土しているが一点だけであるので今後出土の可能性も考えられる。

第三節　弥生時代

弥生時代は、紀元前三〇〇年ごろから紀元三〇〇年ごろまでの間の六〇〇年間ぐらいを、当時使用されていた弥生式土器の名をとって「弥生時代」と名づけられたものである。

この時代になると稲作が行われるようになったために、住居も水を得やすい低地にかわり集団で生活するようになった。

また、使用される道具も、石器、土器等は縄文時代に引き続き用いられていたが、中国大陸から、鉄や青銅などの金属器をはじめ、機織（はたおり）、農耕栽培の技術も伝えられ人々の生活は大きくかわっていった。

当時の日本の人々の生活や国情を記録したものに「魏志倭人伝（ぎしわじんでん）」がある。

「魏志倭人伝」は、中国正史の一つであるところの「三国志」のうち「魏書」三〇巻の中に「東夷伝」があり、それを一般に「魏志東夷伝」とよんでいる。その「東夷伝」はさらに「扶余・高句麗・東沃沮・挹婁・濊・馬韓・辰韓・弁韓・倭人」などの諸伝にわかれており、この中の「倭人伝」に日本に関することが書かれている。

これらは、東夷諸族に関する文献として最も古いもので、紀元前後から魏の正始年間（三世紀中ごろ）までの、地理・風俗・祭祀・官爵・諸族間の関係・漢土との外交や戦いなどの記事が書かれている。

この「魏志倭人伝」や銅鐸に刻まれた絵、各地の遺跡から発掘された土器その他の遺物から当時の生活をふりかえってみることにする。

一、弥生時代の生活

稲作のはじまり　弥生時代に稲作が行われていたことは、遺跡から発見された「炭化モミ」や土器に残された「モミ痕」によって証明することができる。

九州では、弥生式土器としては最も古いといわれている板付式土器とともに「炭化米」が福岡市の板付遺跡から発見されている。

岱明町古閑原貝塚（縄文中期）からは、昭和二三年（一九四八）の調査が行なわれたときに、貝層のすぐ下の粘土層から「炭化モミ」八粒が発見され、

「縄文時代にすでに稲作が行われていたのではないか」

と、考古学会でも大きな話題となった。

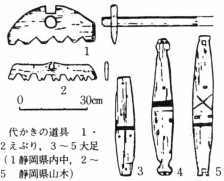
しかし、「農具がいっしょに発見されていないこと、上層の弥生式文化層からモミが落ちこんだとも考えられること、また、ここ一カ所だけでほかに例がないこと」などの理由で認定はされなかった。

昭和八年（一九三三）に、菊池郡大津町小林の「ワクド石」から出土していた縄文晩期の御領式鉢型の土器をその後入念に調べてみたところ、モミの圧痕らしいものが発見された。この土器と同時に「石包丁」も発見され縄文晩期には「米」を食糧としていた有力な手がかりとなった。

稲作を開始した時期については、今後学者の間で論ぜられるであろうが、いずれにしても縄文から弥生にかけて伝えられたにちがいないと考えられる。

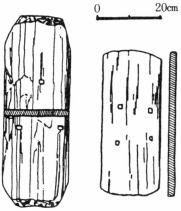
いろいろな農具　全国各地の弥生遺跡から出土した農具について調べてみると、現代まで使用されてきた農具とあまりかわってないなことがわかる。

田げた　「大足」とまちがわれやすいが「田げた」は、湿田での稲刈りなどにはくもので、長方形の板に下駄の緒を通す穴が三～四個つけられている。



代かきの道具　1・2えぶり，3～5大足（1静岡県内中，2～5　静岡県山本）

代かきの道具
（木下　忠「日本の考古学Ⅲに」による）



田下駄

えりぶと大足　田植えの準備の「代かき」に使われたもので、「大足」は、苗代や本田に青草や堆肥をふみこむための大きな下駄であり、「えりぶ」は耕した水田のでこぼこをならして平にする道具である。

くわとすき　刃先まで木製となっているものが多く、カシ、イチイなどの固い木で作られている。中期以降になって鉄製の刃先がでてくるようになる。

田舟　田植えのときは苗をくばり、収穫のときは刈りとった稲を積んで水田の中を畔まで運ぶために使われていたもので、長洲で現在使われている「のり舟」を小さくして把り手をつけたようなものと考えればよい。

石包丁と鎌　石包丁は、稲の穂をつむ道具で、西日本にひろく分布しており、鎌は弥生中期から後期にかけて石包丁にかわってあらわれた鉄製のものである。

二、鉄器の渡来

弥生時代の中期になると、金属器が使用されるようになった。まず鉄器が大陸から輸入され全国に普及していった。

最古の鉄斧　天水町玉水大字尾田の斉藤山貝塚は昭和三〇年（一九五五）に発掘調査がなされ、縄文時代では最も新しい夜臼（ゆうす）式土器や弥生時代では最も古い板付式土器といっしょに鉄製の斧が発見されている。これは日本で最も古い鉄製の斧とされており、古代史を解明するうえで重要な役割りを果たしている。この鉄斧は、長さ四・二㎝あり片刃で台木をはめこむ袋部のついたものであるといわれている。しかし、

大陸で作られて渡来したものか国産品であるかは不明である。

小岱山麓の製鉄窯跡群　小岱山の中腹から山麓にかけて点在する製鉄窯跡は約三〇か所におよび、荒尾市の府本、樺地区に集中している。

長洲の海岸にも見られていた砂鉄を利用したもので、遺跡からは、鉄滓・玉鉄とともにフイゴの口が発見されている。

松本健郎氏によれば、年代は平安から鎌倉時代の可能性が強いと見られている。

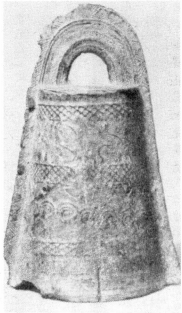
その他の鉄器　全国から出土しているこの時代の鉄製品の主なものとしては次のようなものがあげられる。

農耕具　クワ先・スキ先・鎌
木工具　チョウナ・ヤリガンナ
狩猟具　刀子・鏃（やじり）
漁撈具　銛（もり）・釣針
武器　鉄刀・鉄剣・鉄矛・鉄戈
武具　ヨロイ・カブト

三、青銅器の渡来

鉄器に続いて青銅器が大陸から伝えられた。

青銅製品は鉄とちがって腐食が少ないためにそのままの形で出土しているものが多い。



銅　鐸

青銅器は、紀元前三世紀ごろ中国の秦の時代にはじまり、それが朝鮮半島を経て北九州に伝えられたと考えられている。

この時代を代表する青銅器としては、銅鉾・銅剣・銅戈などの武器をはじめ銅鐸・銅鏡がある。

銅鉾　銅鉾はもともと武器として作られたものであるが、その大きさや埋蔵の場所などから考えると祭祀用として使われたとみられている。県内でも表のように銅鉾が発見されているが白川を境として県の北部ばかりである。

大津	国産の銅鉾	一	銅戈	四
小国	国産の銅鉾	二		
植木	輸入の銅鉾	四		
菊池	輸入の銅鉾	一		
鹿本	国産の銅鉾	二		

熊本県の銅鉾

銅鐸　銅鐸は近畿地方を中心としてその周辺から多く発見されている。

天智天皇七年（六八八）近江国（滋賀県）から掘り出されたものが日本における記録に残されている最初のものであり、また、高さ五尺五寸（約一六五cm）もあり最大のものとされている。

鐸身には、蜻蛉・蛙・亀・鳥などの動物をはじめ舟、家屋・弓や槍を持った猟師、米を搗く人などがかかれており当時の生活を知る上に貴重な資料となっている。

銅鐸の用途については明らかではないが、釣り吊げるための「紐」があることや、内部に「舌」のあるものがあることなどから、初めは楽器として造られたものが後には祭祀用として使われていたとみられている。

銅　鏡

貨幣　当時中国で造られた貨幣がほかの金属器と同じように日本に伝えられており鏡とともに年代を知る大切な手がかりとされている。

「貨泉」という文字のはいったこの貨幣は紀元一〇年ごろのもので、県内では菊池市長田下長田で発見されている。

銅鏡　鏡も青銅で作られ大陸から輸入されたものであるが、仿製鏡とよばれて日本で作られたものもある。

現在では鏡は姿見として使われているが、当時は祭祀用として用いられていたようである。

弥生中期の墓からは前漢鏡、後期の墓からは後漢鏡が出土しており、弥生文化の時代区分をするうえで重要なものとされている。

青銅鏡にはその文様や形態によっていろいろに名づけられているがその主なものをあげると次の通りである。

清白などの語がふくまれている清白鏡、長生不死の仙人を崇拝する思想が信じられていたころの方格規矩四神鏡、紐を通す孔をつくるために鏡の背面につくりつけた突起が二―三個ある多紐細文鏡、三角縁神獣鏡は、半肉彫りの神人および獣形の文様をもった鏡で、縁の断面が三角形をしているところから名づけられている。

衣　「倭人伝」には、

「稲や麻を栽培し、桑を植え蚕を飼い、生糸をつむぎ細麻の布を織り、まわたを作っている」

人物埴輪

舟

と書かれており、そのころすでに「絹・麻・綿」の繊維が生産され、栽培技術や紡績、機械の技術も進んでいたことがわかる。

衣服については、埴輪の人物の服装を見ても農夫・武人・貴人とそれぞれ結髪の上に帽子や冠をかぶり、上衣にズボンをはき帯をしめていたことがわかる。

食　この時代における食生活に一大変革をもたらしたものは稲作である。

狩猟・採集という不安定な食生活から、栽培技術の進歩によって安定した収穫を得ることができるようになり、人々は一定の場所に住みつくこととなった。

倭人伝には「橘（たちばな）、生姜（しょうが）、茗荷（みょうが）、山椒（さんしょう）がある。倭の地は気候温暖で、四季を通じて生野菜を食する」とあり、野菜、根菜、果菜の栽培が行われていたことがわかる。

植物性の食物のほかに動物性のものも脂肪やタンパク源としてとられていたことはもちろんである。

火の使用については、直接に火にあてて焼いたり、甕（かめ）やつぼに入れて煮ていた。

六栄地区から出土した土器片にも火によって黒くこげたあとが見られる。

生活用具として使用された弥生式土器には、甕（かめ）、壺（つぼ）、高杯（たかつき）の三種の基本の形態があり、甕は煮炊用の日常使われるもので文様はなく、壺はモミを貯蔵するために美しく文様をつけて飾り、高杯は食物を盛って供え

るためのもので高い台の上に皿が取りつけられた形をしている。これらはいずれも農業生活の必要から生み出された容器である。

住　住居はふつう竪穴式で、水田を作るために低地に近い地域に住みついていた。

岱明町下前原遺跡の調査報告書によると、二反半（約二五ａ）の畑から三一個の住居跡が見つかり、そのうち最も大きいものは、東西八・六ｍ、南北五・三ｍで現在の畳を敷きつめると約三〇枚となり非常に大きなものであったといえる。

中期以降になると、集落の周囲に堀をめぐらした跡がある。

天水町野辺田遺跡には、幅二ｍ、深さ一・五ｍの堀の跡ができており、外敵からの防禦のためと考えられている。

弥生時代の埋葬　墓地は共同墓地となり住居から離れたところに作られるようになった。

種類としては、甕棺墓・土壙墓・箱式石棺墓・木棺墓・支石墓など種々にわたっている。

甕棺墓　弥生文化の代表的墳墓で、北九州を中心とし全国的に分布している。

甕・壺・鉢を利用し、単甕に石のふたをしたもの、鉢や高杯をふたにしたもの、合口甕棺などがある。

岱明町下野口塚原では、甕棺四個、箱式石棺が発掘されている。

甕棺は、上鉢の口径六七㎝、高さ四二㎝、下甕の口径七七㎝、高さ一一九㎝で、合せ口は粘土で目ばりをしている（昭二八・田辺哲夫氏報告による）

そのほか同町野口字早馬の年の神遺跡付近から、壺棺数基も発掘されており現在岱明町中央公民館に展示

されている。

土壙墓　北九州・山口県に多く、長方形や楕円形の竪穴を棺とたもので、壙内に石を敷いたり板石を一面に立てかけたもの、上に石ぶたをしたものなどがある。

岱明町山下字天神木の中道貝塚からは、五つの墓が発見され、一つは長方形の土壙を掘って埋葬して土をかぶせ、上を板石で覆ってある。ほかの一つは土壙の壁を粘土で固めてある。ほかに石積みの土壙墓二つと甕棺の破片をかぶせた土壙墓一つとなっている。

箱式石棺　北九州から山口県にかけて存在し、単葬から数体を合葬したものまである。

岱明町北野口大原では箱式石棺一〇基が発見されており、現在では、岱明町中央公民館前庭に復元保存されている。

大原の箱式石棺

支石墓　支石墓は地上に多くの塊石をおき、その上に巨大な石をすえ、下に土壙、甕棺などの地下施設をともなった墓である。

岱明町野口にある年の神支石墓は、縦二・五二m、横三・〇四m、厚さ〇・七二mの安山岩のものと、縦一・七六m、横二・六〇m、厚さ〇・六〇mの花崗岩の石撑（せいしょう）をもつものがあり、石撑の下には直径五cm大のおびただしい原石が敷かれていた。

四、弥生式土器

弥生式土器の名のおこりは、明治一七年（一八八四）当時の東京市本郷区弥生町向ケ岡貝塚を有坂鉛蔵氏が調査した時に発見した土器を町名から名をとって「弥生式土器」とよんでいる。

弥生式土器は縄文土器のように重厚、複雑なものはなく、薄くて文様も簡単なものである。しかし、生活の程度が高まるにつれて用途に応じた色々な形のものが造られてきている。

弥生式土器

土器は形式によって、前期、中期、後期の三期に分類されている。

前期は、北九州の板付式土器にはじまり遠賀川式土器へと続いており熊本県内にも広がってきている。

中期になると須玖式土器（筑紫郡春日市須玖）が入り宇土半島あたりまで及んでいる。

中期の終りごろに、熊本市黒髪町の済々黌（せいせいこう）高校の校庭から黒髪式とよばれる土器が出土し、北は福岡県大川市、南は人吉盆地、宮崎県高

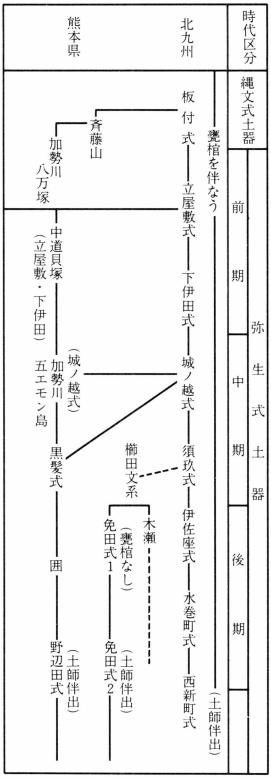
千穂付近まで広がっている。

後期にはいると、人吉盆地の免田町から免田式と名づけられた土器が出土し、北は山鹿地方、東は宮崎県西臼杵郡、南は鹿児島県の桜島にまで普及している。

免田式が普及していない地方では、櫛目文と呼ばれる、櫛の歯でつけたような波の形や円形を描いた文様の土器が発見されている。

後期も終末期になると、玉名郡天水町から野辺田式が発見されている。

熊本県の弥生式土器の編年　県内における弥生土器の編年は、乙益重隆氏によれば次の表のとおりである。



弥生式土器編年表

五、長洲町の弥生遺跡

長洲町における弥生遺跡は、現在まで土器片等のみが発見されており、住居跡等の発掘調査も行われていないので、遺跡と名づけるよりも包含地帯と呼んだ方が適当ではないかと考える。

分布は、小岱山から南へ延びるなだらかな丘陵の突端に近く、前にも述べたように、当時の海岸線に沿って、わずかに水田を耕作し得る程度の広さを近くに持っている場所を選んでいる。

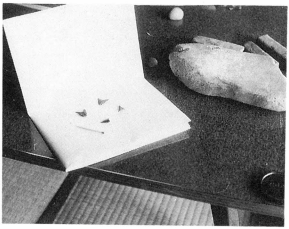
六栄地区に最も多く腹赤・清里地区にまたがっており、今後も出土する可能性は充分にあると考えている。

六栄地区　六栄地区の埋蔵文化財の発掘蒐集は、昭和四一年、当時六栄小学校に勤務していた筆者が、社会科の授業及び郷土研究のクラブ活動の中で、児童と共に行ったものであり、昭和四三年に「古代文化遺跡の研究」として簡単な報告書をまとめている。

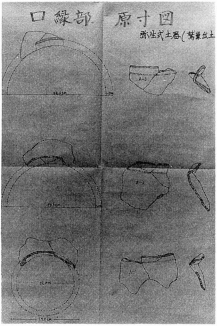
○　下赤田遺跡　国道二〇八号線の赤田付近から南へ延びた一帯で、多数の土器片が出土したらしいが破損紛失されている。

黒曜石の石鏃数個と石器を磨いたと思われる「砥石」が赤田の小川利明氏宅に蔵されている。

○　百谷遺跡　鷲巣の八幡山から狐谷に続く丘陵の中ほどにある馬場正光氏所有のみかん畑より多数の土器片が出土している。



赤田の石鏃と砥石

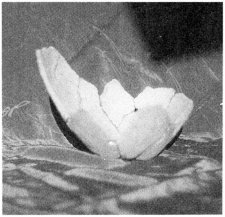


口縁部

しかし、口縁部・胴部・底部と数多くの土器片があるが、一つにまとめられるような完全な形のものはなく、部分的に復元図をとってみる程度にすぎない。

口縁部は、くの字形となっており、口径は約一四㎝ぐらいのものから二二㎝ぐらいのものと推測される。

文様は、くし目がわずかに見られる程度で様式はわからない。



胴部

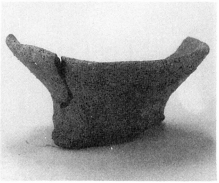
胴部は、採集された土器片がばらばらで、しかも、もろくてくずれやすくなっていたために接合復元に困難であったが、そのうち一個だけは写真のように接合することができた。高さ、約二二㎝、上部の口径二〇㎝、底部の直径七㎝あり、ふくらみも少なくカメとして煮炊きに使用していたものと思われる。

底部は、写真に示すように、朝顔型のものと平底との二つにわかれている。

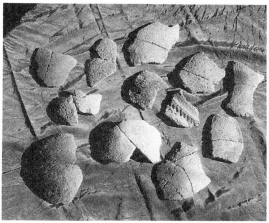
朝顔型のものは、底の直径約一二㎝、高さ約5㎝ぐらいで、カメやつぼのすわりをよくしていたものと思われる。

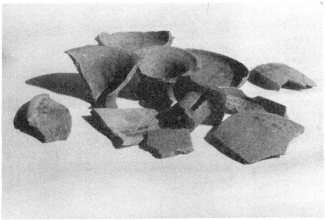
これらの土器片は胴部は破損してしまっているが、口縁部及び底部は、中央公民館に展示されている。

鷲巣出土土器



馬場氏所有みかん畑





土　器　片

○　東ノ前遺跡　　一先宮より宮崎にかけての中央部の東側斜面にあり、出目将一氏の畑地である。

高さ一・六ｍほどの崖をくずし採土していたときに発見されたもので、そこは表土から六〇㎝、幅四・八ｍにわたって赤土と黒土の層がはっきりとわかれており住居跡であったのではないかと考えられる。

出土したのは、写真のようにほぼ完全な形の高杯（たかつき）とつぼ、それに須恵器のふたつきの碗の破片などであり、弥生時代の後期から古墳時代にかけてのものである。

高杯は高い台のついた杯状の食器で、古墳時代まで使用されており、ふたつきのものもある。

この高杯は、碗部の直径約一一・五㎝、台の高さ約一〇㎝あり、台の中は空洞となっている。文様や彩色はなく土師器（はじき）である。

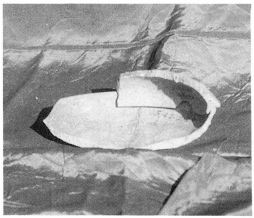
東の前出土の高杯とつぼ

写真のつぼも同じ時代のものと考えられる。つぼは口径約一二・五㎝、高さ一二・一㎝のもので、下の方にふくらみをもち、糸底がつけられていた。非常にうすくもろかったために保存が悪く破損してしまった。

高杯やつぼと同時に出土したものに、朝顔形のコップ状のものがある。時期的にも大体同じ時期のものと考えられる。

口径一二㎝、底の径五㎝、高さ七・四㎝のもので、文様は全くなく外がわをヘラでこすり形をととのえたと思われる。

手に握れるくらいの大きさであり、酒や水を飲むときに使用されたと考えられる。



東ノ前出土ふたつき皿

その他の土器片については復元できるものはないが、口縁部の形やわずかに見られる文様から、様式としては野部田式の系統をくむものである。

時代は下るけれども、須恵器が同時に出土している。

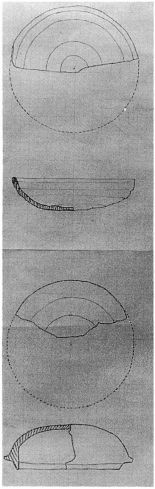
写真及び図のように、高さ八cm、直径一四cmのふたつきのもので、「ろくろ」を使用して作られていることがはっきりとわかる。

松本健郎氏の「肥後の須恵器編年表」によれば、大和窯の系統を引くもので、今から約一五〇〇年ほど前のものである。

○　葛輪遺跡　葛輪の硯川昌明氏宅裏の下鴻ノ池の土手からは須恵器の土器片と、首のない動物の「埴輪（はにわ）」が出土している。

動物の「はにわ」は、長さ一五cm、高さ一二、五cmあり、胴部と足二本が発見されているが、胴部の状態から「馬」であることに間違いはない。

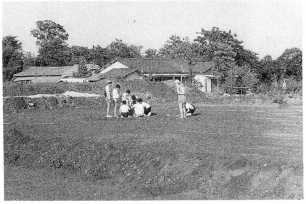
この「埴輪」が何のためにつくられていたかは不明である。

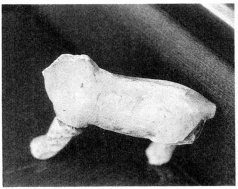


永方東前出土

現在長洲町中央公民館に展示されている。

葛輪は小岱山に近く、荒尾市の府本地区では須恵器の窯跡があり、大生産地であったと考えられることから、このあた





葛輪出土のはにわ

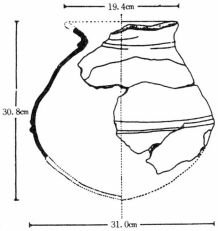
りでも窯跡の発見も可能ではないかと考えている。

○　向野（尾崎台）遺跡　　日立造船の進出によって、現在は住宅の密集地となっているが、当時は写真のように一面の水田地帯で、中央の住居は、現在の浦部精氏宅である。

集められた土器片はダンボール箱にいっぱいあり、古代六栄地区では最も大きな集落であったろうと考えられる。

土器の内容としては、カメやつぼが多く、中にはカメ棺ではないかと考えられるような大きなものもある。

集められた土器片のうちで最も大きなものは、四つに割れていたが、接合して復元図を作成してみると図のようになると想像される。

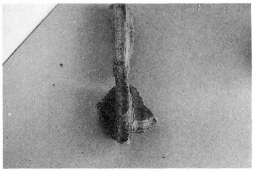


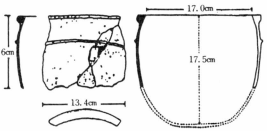
向野（尾崎台）出土土器復元図

口縁部の直径約一九・四cm、頸部の直径一六・〇cm、胴部の直径三一・〇cm高さ約三〇cmである。

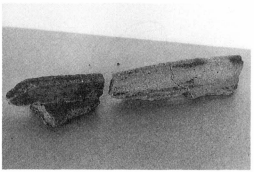
口縁部はくの字形で外反し、頸部に突起した帯状の文様がほどこされ、胴部には二条の同様の文様がつけられている。

胎土はきめが細かくうすい褐色をしている。





尾崎台出土土器実測図



尾崎台出土土器片

底部は、明確にはわからないが、丸底又は平底のつぼではなかったかと思われる。

このような文様は、須玖式の甕棺にも見られるので、時代としては弥生中期のものと考えられる。

いまひとつの土器は、上図のように口径一七㎝、高さ一七・五㎝、胎土は粗いが焼きがかたく、厚さ五㎜という非常にうす手のカメである。

文様は、口縁部と胴部につけられている。

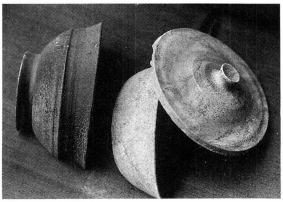
この土器の特長は、さきにも述べたように非常に薄いということと、色が他の土器にくらべて赤味が強いことである。

藤の花の色を濃くしたような色で、彩色されたのではないかと見違えるほどである。

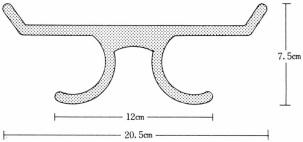
そのほかには、写真のように厚手で大きな握り手と思われる突起した文様を持つものやこしきの取り手と考えられるものが出土している。

○　向野（安保）遺跡　昭和六十年に六栄小学校の児童によって、学校の東南の台地（緑屋の前）より採集されたもので、つまみのついたふたつきの椀である。

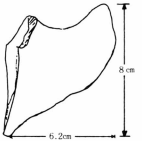
写真を見てわかるように、ろくろが使用されており年代

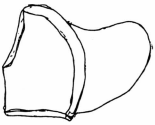


安保出土土器



辻屋敷出土土器復元図





こしきのとりて

としてはずっと下って、鎌倉時代のものではないかと思われる。

○　宮崎（辻屋敷）遺跡　中山光氏宅の裏の崖から出土した、台付きの皿で土師器である。

復元図を作成してみると、図のように、上部の皿は直径二〇・五cmで縁のところがそりまがっている。台部は直径一二cmあり中は空洞となっている。

そのほかに須恵の土器片が発見されている。

○　その他　六栄地区においては、その他にも未確認であるけれども遺跡と考えられるものが記録や話として残されている。

折地天満宮東側に貝塚がある。（林田賢）

四郎丸からカメ棺が出た　（林田賢）

六栄小学校裏の茶畑をブルドーザーで地ならしをしていたところ、大きな穴がぽっかりとあいた。（宮野八郎、現中央公民館長）

腹赤地区　腹赤地区の弥生遺跡については、出土

した遺物は残されてはいないが、町文化財保護委員でもあり、また町史執筆者のメンバーでもあった、故、林田賢氏の遺稿によれば、

○　新町墓地台地から弥生式土器片が出土した。

○　腹赤の西林詮氏宅の後庭から、カキ・アサリの貝殻とともに土器片と、ろう石製の平底鍋の破片が出土している。

と記述されている。